

IV 花 き

実 況

1 キク

奥越の春植え夏秋ギクは、8月21日の調査で、「小鈴」で草丈103 cm、葉数49枚、収穫のピークは8月12日頃、「小紫」で草丈105 cm、葉数41枚、収穫のピークは8月10日頃、「シューペガサス」では草丈106 cm、葉数55枚、収穫のピークは8月12日頃であった。

病害虫として、オオタバコガが少発生、アザミウマ類とハダニ類が多発生している。

坂井の秋植え季咲きキクは、8月下旬から台刈りが開始された。その後土寄せを行う予定である。

年末出荷用の寒菊は、8月上旬にハウスに定植された。

福井市の二日市の春植え夏秋ギクでは、8月9日の調査（昨年：8月15日）で、「小鈴」で収穫終了（昨年：収穫終了）、「花絵」で草丈110～120 cm、50%程度収穫（昨年：草丈83 cmで50%程度）、「小雨」で草丈90～100 cm、約80%収穫終了（昨年：草丈78 cm、50%程度収穫）であった。

病害虫は、アザミウマ類が少発生している（写真2）。

福井市東郷の春植え夏秋ギクでは、8月9日の調査（昨年：8月15日）で、「小雨」は草丈100～110 cmで約80%収穫、「西の星」は草丈100～110 cmで約80%収穫、「小鈴」で草丈100～110 cm、約80%収穫された。

病害虫として、アザミウマ類は少発生している。

越前町宮崎地区の8月咲ギクは、8月14日の調査（昨年：8月15日）で、「小鈴」と「翁丸」が収穫終了（昨年：「小鈴」終了、「翁丸」ほぼ終了）、「花絵」が草丈111 cm、開花は20～30%で収穫を開始した（昨年：草丈99 cmでほぼ収穫が終了）。

病害虫として、中位葉以下に黄変落葉の症状が中～多発生、品種間で発生に差異が生じている。

越前市の8月咲ギクでは、8月15日の調査（昨年：8月14日）の「はじめ」の草丈が92 cm（昨年：エスレル2回処理で草丈は96 cm）で収穫はおおむね終了（昨年：エスレル2回処理で、草丈96 cm、収穫60～70%程度）、「秀光」では草丈115 cm、収穫80%（昨年：エスレルが1回処理、草丈117 cmで収穫は80～90%）、「恋心」では草丈108 cm、収穫は90%程度（昨年：エスレル2回処理の個体では草丈110 cmで収穫は70%程度、エスレル1回処理の個体では草丈115 cmで収穫90%程度）であった。

二州の春植え8月咲きキクとして「小鈴」、「翁丸」、「恋心」等の品種が栽培され、8月7日～12日まで集荷された。お盆よりやや早い出荷となった（8月15日調査）。

病害虫として、一部圃場でアザミウマ類が多発生している。



写真1 葉裏のアザミウマ類の食害痕



写真2 オオタバコガによる食害

春植え 9 月咲き小ギクの草丈は、8 月 15 日調査（昨年 8 月 9 日）では、「わかさ」で草丈 75 cm、蕾径 2 mm（昨年：草丈 95 cm で未出蕾）、「映紅」が草丈 80 cm、蕾径 4 mm（昨年：草丈 92 cm、蕾径 6 mm）、「おりがみ」で草丈 90 cm、蕾径 3 mm（昨年：草丈 106 cm、蕾径 5 mm）であった。生育は前年よりやや遅い傾向である。

10 月咲き小ギクの生育は、「はくろ」が草丈 40 cm（昨年 25.0 cm）、「お吉」が草丈 40 cm（昨年 54.5 cm）、「ふるさと」で草丈 45 cm（昨年 45 cm）であった。

病害虫は一部の品種でハダニ類（多発）、アオムシ（微発）、黒さび病（中発）が発生している。

若狭の春植え 8 月咲きキクは、8 月 19 日の調査（昨年：8 月 14 日）では、ほとんど収穫が終了し、お盆の出荷は平年並みであった。

病害虫として、カメムシ類の吸汁痕が確認された。また褐斑病、黒斑病が中発生している。

9 月咲き小ギクは、8 月 19 日調査（昨年：8 月 14 日）で、「楽園」で草丈 99 cm、蕾径 4.5 mm（昨年：草丈 74.8 cm、蕾径 3.6 mm）、「初秋」で草丈 97 cm、蕾径 6.4 mm（昨年：草丈 70 cm、蕾径 5.6 mm）、「おりがみ」で草丈 102 cm 蕾径 6.6 mm（昨年：草丈 86.8 cm、蕾径 3.9 mm）で、昨年より草丈が長い。

病害虫として、ハスモンヨトウが少発生している。

10 月咲き施設栽培の小ギクは、8 月 19 日の調査（昨年：8 月 14 日）で、「おちば」の草丈が 50.8 cm（昨年：22.8 cm）、「白馬」では草丈 41 cm（昨年：31.2 cm）、「おりづる」で草丈 56.8 cm（昨年：50.6 cm）となっている。どの品種も生育にばらつきがみられる。

病害虫として、アブラムシ類が少発生している。

11 月咲き電照施設栽培では、8 月 19 日の調査（昨年：8 月 14 日）で、「おちば」で草丈 44 cm（昨年：20 cm）、「白馬」で草丈 30.4 cm（昨年 24 cm）、「おりづる」で草丈 47.4 cm（昨年 26.4 cm）であり、生育は昨年と比べると良好である。

病害虫として、アブラムシ類が少発生、ハスモンヨトウが少発生している。

寒ギクは 7 月中旬に定植が行われた。「冬一番」、「寒桜」「新年の美」等の品種が栽培され、いずれの品種も草丈は 7～15 cm（昨年：3～6 cm 程度）で、ばらつきが大きい。「夢ほまれ」では枯死株の割合が高い。

病害虫として、アブラムシ類が少発生している。

2 ユリ

あわら市では、4 月上旬に露地に定植した「オーガスタ」は、8 月 15 日の調査で、ほぼ収穫が終了した。5 月中～下旬に露地に定植した「オーガスタ」「雷山 3 号」は 8 月 15 日過ぎから収穫が始まった。「オーガスタ」は輪数の揃いが良く（2～4 輪が 70% 以上）、「雷山 3 号」は花型は良いがばらつきが大きく、1 輪花も多い。



写真 3 出荷間近のシンテッポウユリ
（8 月上旬、あわら市）

3 ストック

あわら市では、夏撒き秋冬取りの作型用に、アイアン系シリーズの品種を用いている。直播栽培では、8月15日過ぎ（昨年：8月8日）から播種を開始、移植栽培（写真4）では、8月10日（昨年：6日）から定植が開始された。移植後の活着は良好である。定植・播種前の圃場は、太陽熱を用いて雑草対策を主たる目的として行われた。

越前市ではカルテットシリーズが8月20日頃に直播された。



写真4 ストックの移植栽培

4 トルコギキョウ

あわら丘陵地の二度切り栽培（抑制栽培）では、種子冷蔵苗（購入苗）の定植が7月25日から8月上旬（昨年：7月下旬～8月5日）に行われ、活着はおおむね良好である。品種は主として、レイナ系、ロベラ系である。8月15日の調査では、本葉6～7対、草丈10～15cmで、ロゼット株はほとんど見られない。

4月定植のロジーナ系、「バルカンマリン」他の品種は7月中旬～8月上旬で収穫が終了した。

5月定植のPFソロ、ファイナル系他の品種は、40%程度収穫が終了した（昨年：60%）。PFソロ系のリップの発色（バイカラータイプ）は高温下でも安定し、滲み、流れはほとんど見られない。



写真5 抑制栽培のトルコギキョウ
（8月中旬、あわら市）

越前市では、盆用の収穫がほぼ終了した。7月下旬に苗冷蔵を行った株の定植が行われ、8月15日の調査（昨年：8月15日）で、草丈10cm、対葉数3～4に生育している。

二州地区では、ラベンダー・フラッシュシリーズの品種が栽培されており、8月7日～12日まで集荷され、お盆までにはほぼ出荷された。

病害虫として、一部圃場でアザミウマ類が多発生している。

5 その他

切り花用ハボタンは、福井市東郷で7月25日から定植された。8月9日の調査では、草丈10cm、葉数10枚であった。

病害虫は特に認められなかった。

対 策

1 秋植え夏ギクの定植準備と定植

1) 苗づくりの管理日程

| 時 期 | 8/17 | 9/10 | 9/15 | 9/25 | 10月上 |
|--------|------|------|------|------|--------|
| ・かき挿し苗 | 台刈 | | かき挿し | | 苗とり・定植 |
| ・土寄せ苗 | 台刈 | 土寄せ | | 仮 植 | 定植 |

高温で株が弱っている株については、雨をめぐけて台刈りを行うか、雨後草勢が回復してから行う。草丈が低くスタントウィロイドに罹っている可能性がある株や黒さび病が罹病している株は用いない。

2) 苗床の病虫害防除の徹底

白さび病とアザミウマ類、ハダニ類を中心に防除を徹底する。病気に弱い品種は特に罹病しないように注意する。ウイルスを媒介するアザミウマ類の防除を励行する。併せて周辺環境の除草を励行し、飛び込みを防止する。

病害：有機硫黄系剤（ステンレス剤、ジマンダイセンフロアブル、エムダイファー水和剤）を週1回、予防剤散布する。

害虫：ミカンキイロアザミウマやミナミキイロアザミウマには、オンコル粒剤5やプリンスフロアブルを散布する。カブラヤガが産卵を行うときがあるので、適切な対策を行う。ただし、プリンスフロアブルは大型の幼虫(オオタバコガ等)には効果が少ない場合があるので、注意する。薬剤散布にあたっては、抵抗性害虫の発生を抑えるため、必ず違う系統の薬剤をローテーションして行う。

3) 苗の育成

(1) かき挿し苗

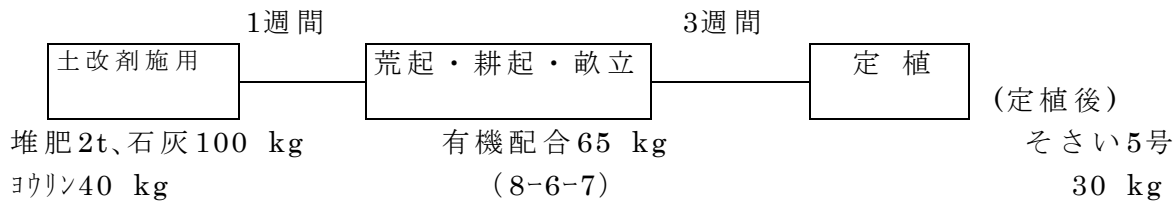
台刈2～3週間後の9月上中旬に、わき芽の長さが10 cm程度になったかき挿し苗を、親株の付け根より掻き取って用いる。穂は、天幅1 m程度、高さ15 cm程度の畝をつくり、5×10 cm程度の間隔で挿す。挿し芽後は十分に灌水する。1週間程度は、株の消耗を抑えるために寒冷紗などで30%程度遮光する。発根後に、有機配合肥料（窒素6%程度）を1m²当たり100 gを条間に施用するとともに、液肥1000倍を1週間に1回、2回程度施す。

(2) 土寄せ苗

9月上中旬頃に土寄せする。充実した苗をとるために、畝10 m当たり有機配合（窒素成分6%程度）を1 kg、そさい5号を200 g程度を施す。

4) 苗の定植時期は春の芽立ちを良くするため、奥越地方で9月下旬～10月上旬、福井平坦部で10月上旬、若狭地方で10月中旬までに植え付けるよう定植準備を進める。輪作の間隔が短いとキクの生育が極端に低下するため、最低でも3年間は間隔をあけることが望ましい。

5) 標準的作業過程と施肥量 (10a当り資材量)



6) 排水が悪いと越冬性が低下するので、排水の良い圃場を選定する。額縁排水など排水路の整備を行う。

7) 標準的な畝幅は1.3 mとするが、排水の悪い圃場や耕土の浅い所では狭めにとる。畝の高さを20 cm以上確保する。畦成形後、速やかに灌水し、除草剤の前処理剤を散布しておけば、翌年まで抑草効果がある。

8) 栽植密度は35 cm条間の2条植えとし、株間は10 cmを標準に芽立ちの悪い品種はこれより狭くし、芽立ちの良い品種は広くする。また、6月咲きや芽立ちの悪い品種は早めに定植する。

2 秋ギクの肥培管理と防除

肥効が落ち、葉色が淡くなり、葉の生育が悪くなっている場合は、マルチの条間部分を破って雨水を入れることで、土壤中肥料の肥効を高める。また、1000倍に希釈した液肥を葉面散布するか、開花30日前後に速効性の化成肥料を少量施用する。ただし、白さび病、黒さび病の兆候がみられる場合は控える。また、8月中下旬からオオタバコガが多発するため、ローテーション防除を行い、被害の抑制を図る。

3 キクの主要病害虫防除

1) キクの白さび病

9月に入り気温が低下し、雨が多くなると、白さび病発生の好適条件となるので防除を徹底する。下葉に病斑がある場合は病葉を除去し、チルト乳剤25、アンピルフロアブルなどの治療剤を葉裏にもかかるように散布する。ただし、感受性が低下した薬剤は、散布しない。

2) アブラムシ類は圃場の周辺(畝のはし)から侵入するので、初期の防除に努める。薬剤抵抗性の発生を避けるため、系統の異なる薬剤(例:オリオン水和剤40(カーバメート系)、アーデント水和剤(ピレスロイド系)、モスピラン水溶剤(ネオニコチノイド系)、ウララ50DF(フロニカミドなど)を交互に散布する。数回に1回はエコピタ液剤等の気門閉塞で殺虫する剤を取り入れ、抵抗性害虫の増殖を抑制するとよい。

3) アザミウマ類も多くなるので、蕾の膜切れの4~5日前より薬剤散布を励行し、花芽の中に害虫が潜り込まないようにする。

4 キククロロティックモットルウイロイドについて

1) 病気の特徴として、キク下葉に退色・緑黄斑症状が現れる。品種や他のウイルス、ウイロイドとの重複感染により症状が異なる。

2) 伝染方法は、接触(汁液)伝染のみであるため、下葉かき、摘蕾などの管理作業は、感染が疑われる株を後回しとし、手袋を変えたり、はさみ等使用器具を火などで消毒したりしながら作業を進める。

3) 台風やネット上げ時の葉擦れによっても感染拡大するため、疑わしい品種は導入しない。

4) 感染株は圃場から除去し、他株に感染が拡大しないようにする。

5 スイセンの管理

1) 季咲スイセンでは、9月上中旬に雨量が少ないと開花期が遅れる傾向があるので、前年に葉先枯病の発生が少なく、用水が確保できる圃場では灌水する。夕方から夜間に灌水し、昼間は溝に停滞水がないようにする。

2) 促成栽培の遮光資材の取り外しは、気温25℃以下になった時点(9月15日頃)を目安とし、曇天の時に行う。

3) 促成栽培では9月下旬以降の灌水をやめ、根腐れ防止のため、溝さらえ等圃場排水を徹底する。

4) 球根養成圃場では、PK化成を1a当たり5 kg、マグフミン等の石灰資材を10 kg 施す。

5) イノシシの獣害が多くみられる地域では、電気柵等で対策する。

6) 台風対策をしっかりと行い、ハウス栽培では補強を行う。雪害にも備えるよう、支柱などを準備し、十分に補強しておく。

6 ストックの管理

1) コナガは育苗中から開花期にかけて常時発生し、葉裏から食害される。苗や生育初期に心葉が食害されると被害が大きく、生育が遅れ枯死することもある。抵抗性の発達しやすい虫であるので、薬剤散布後は効果を確認し、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。トアロー水和剤CT、コテツフロアブル、ノーモルト乳剤などが有効である。コナガコンなどの交信攪乱剤を用いる場合はできるだけ広域に設置する。

2) 気温が高い時期の育苗では、立枯れ性病害の予防対策としてオーソサイド水和剤80を散布する。立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を判別する。簡易な判別法では、苗立枯病(リゾクトニア菌)の発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、苗腐病(ピシウム菌)の場合は、地際部がこより状にくびれ、引っ張るとちぎれないで、根がついてくる傾向がある。生育がやや進むと、苗立枯病では地際部分から褐変し、表皮が脱落して、茎の髓部のみとなるが、苗腐病は根が褐変し、生育不良や萎凋する。

3) 本圃の定植前に立枯れ性病害の予防対策としてガスタード微粒剤20~30 kg/10

aで土壤消毒する。

- 4) 定植後の遮光の期間が長くなると、徒長するばかりでなく花芽分化が遅れ、開花が遅延するので、遮光資材は活着後にできるだけ早く除去する。
- 5) 定植後1か月間は、1週間に1回の間隔で、液肥を積極的に施用し、活着と初期生育を促す。
- 6) ストックの中生や晩生品種では、ビビフルフロアブルの1,000倍を、葉数が10～14枚の時と、その7～10日後に2回茎葉散布することで開花が促進される。10a当たり100リットルを目安に散布する。
- 7) 9月下旬～10月上旬の花芽分化前後に高温に遭遇すると、花とびや心止まりが発生するため、10月中旬まで気温17℃を目安にサイドビニールを開放する。
- 8) 10月下旬から保温を開始するが、日中は必ず換気して温度較差を少なくする
- 9) 発蕾までは草丈を確保するため、灌水を充分に行う。発蕾以降は徐々に灌水回数を減らし、開花期が近づいたらさらにひかえて切り花の品質向上を図る。

7 ハボタンの管理

- 1) 栽培中から開花期にかけてヨトウムシ、アオムシ類等が発生し、食害される。苗や生育初期に成長点の芽が食害されると被害が大きく、生育が遅れ枯死することもある。抵抗性の発達しやすい虫であるので、薬剤散布後は効果を確認し、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。フェニックス顆粒水和剤、プレオフロアブル、ノーモルト乳剤などが有効である。
- 2) 葉かき作業を順次行う。下葉かきを生育期間内に3～4回行い、風通しを良くするとともに草丈を伸ばす。生育初期段階では、葉を込み入らせた方が草丈が伸びるため、葉かき作業は1度行わず、間をおいて徐々に行うことで、草丈を確保することができる。
- 3) 水分管理
露地栽培では干ばつが続いたときやハウス栽培で土壤水分が十分でない場合は、灌水を行い、適切な水管理を行う。逆に、秋の長雨で圃場に停滞水がある場合は排水対策を行う。

アメダスの気象データ

